



Title	「気付かれにくい子ども達」という存在
Author(s)	河野, あかね
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2024, 20周年記念特別号, p. 164-165
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102030
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

« Column 10 »

「気付かれにくい子ども達」という存在

キーワード：インターナショナルスクール、マイノリティ、選択肢、international school、minority、option

選択肢がないインター生

金融庁（2021）によると、インターナショナルスクール（以下「インター」）を選択する主な目的として、「世界トップクラスへの大学進学」「母語での学習の継続」「英語の習得」などが挙げられている。また、インターに在籍する園児児童生徒（以下「生徒」）について、「富裕層」「芸能人家庭」「日本の学校教育に対し否定的な理由がある家庭」「日本語が話せない」などのイメージがあることを耳にする。もちろんそのような生徒も存在し、生徒の中には、多様な選択肢の中からインターを選択する者もいる。一方で、生徒それぞれの背景により、他に選択肢がなくインターを選ばざるを得ない者も多くいる。

かつて、学校教育法第1条に定める「一条校」に勤務していた時に、筆者は「一条校の外国籍生徒や帰国生には制度や環境、周囲の理解が十分整っていないのに対して、インター生には『インター』という環境や枠組がきちんと提供されているから恵まれている」と思っていた。しかし、インターに勤務してみると、実際にはインター生の現状や課題に社会の目が向けられていないと痛感する場面が多々ある。一条校に入る生徒は社会的にはもちろん、学校内でも「マイノリティ」として認識されて、必要なサポートや気配りをしてもらえるのに対し、インター生はインターという「枠」があるから十分だと思われてしまい、時として社会から「気付かれにくい子ども達」になってしまっているのである。

インター生に関わる課題

よく「生徒の国籍は？」という質問を受けるが、実はこの質問への回答は非常に難しい。生徒の中には二重国籍を持つ者も多い。「国籍は？」という質問の意図には「英語母語話者か」「母語は何語か」「日本語は話せるか」等を含む場合が多い。しかし、外国籍であっても「日本で生まれ日本で育ち、自らの国籍の国には行ったことがない」生徒もいれば、日本国籍であっても「外国で生まれ育ち、初めて日本で生活する」生徒もある。また、世界中を移動する中で「母語は何語かわからない」という生徒もいる。日本語力についても、母語、継承語、第一言語として使用できる生徒もいればそうでない生徒もいる。つまり、国籍や母語に関する質問自体がナンセンスな場合も多いのである。

インター生が直面する課題は、日本国籍保持者の就学義務、日本語力、進路選択、経済的な問題など多岐にわたる。日本国籍を持つ者は一条校への就学義務があるが、国籍だけでは生徒の状況を掌握することは難しく、必ずしも一条校が最適な環境とは言えない場合もある。長年海外で過ごしてきた生徒に、突然完全な日本語環境に入れというのは酷な場合もあると考えられるが、一人ひとりの背景を考慮してはもらえない。インター生の中には、休暇を利用して一条校に登校し、日本の学校生活を経験しようとする者もいる。そのような希望に対しても、各学校、各教育委員会によって対応が異なり、受け

入れてもらえることもあるが、冷たく断られることもある。もちろん、受け入れには負担が大きいことは承知しているが、「インターを選ばざるを得ない子ども達」が、一条校に、ひいては日本社会に少しでも入ろうとする姿勢は認めていただきたいものである。

インターには、学校法人の認可を受けた各種学校と認可を受けていない学校がある。いずれの場合も、様々な点において一条校とは異なる。例えば、大学入試において、文科省の定める大学入学資格を満たしても、大学が定める要件には該当せず、推薦入試などにインター生というだけで出願できないことがある。大学に問い合わせをすると、担当者が初めてそのような生徒の存在に気付いたという場合も多い。中学や高校入試も同様で、帰国時点ではインターを選択せざるを得なかったが、日本の生活に慣れ日本語力が身に付いて、一条校に進学したいと考えても、入試制度により出願できないことがある。インターの保護者や教員は日本の教育に否定的なのではないかと尋ねられることもあるが、確かにそのような人々もいる一方で、むしろ日本の教育について非常に肯定的に捉えている者も多くいる。そして、子どもに日本の教育の機会を与えたいたと考えるのだが、制度的に難しい状況なのである。

インターに在籍する「気付かれにくい子ども達」の存在

前述の金融庁（2021）の調査においても、インターに関する情報を得られる場が少ないということが課題の一つに挙げられているように、社会においてインターが適切に認識されているとは言えない。そして、それにより、社会に「気付かれにくい子ども達」が生まれているのである。インター生が日本語を話すと「日本語が話せるのか」と驚かれる。「外見が日本人」のインター生は、日本語に不自然さがあつたりいわゆる日本の一般常識と呼ばれるものに少しでも欠けていたりすると「日本人なのに」と言われ、彼らがインター生だとわかると「インター生だから仕方ない」と言われる。これはインター生に限らず、いわゆる「外見が外国人」であるが故に日本語で話しても英語で返されるとか、「外見が日本人」であるが故に日本語が少しでも不自然だと変わり者扱いされるとか、そういう事例とも関連した、マイノリティに関する社会的な課題である。

子ども達は自らの意志ではなく大人の都合や事情によりその状況に置かれている。インターにいる「気付かれにくい子ども達」の存在により多くの人が気付き、そのような子ども達の居場所や教育環境を整えることの必要性や重要性を今後議論していくべきである。

引用文献

金融庁（2021）「日本及び主要国におけるインターナショナルスクールに関する調査」https://www.fsa.go.jp/common/about/research/20210831_2/20210831.pdf

河野 あかね（つくばインターナショナルスクール）